

カメラを持ったら気を付けて!

気持ちよく撮るための13のこと

文・野田真愉美

人や自然に迷惑かけずに撮影しているカメラマンが多
いなか、一部のマナー違反や危険な行動をする人の影響
で、最近は「カメラマンは自己中心的」と思われがちで、
撮影禁止の場所も多くなってきました。ちまたで起こっ
ているマナー違反や危険な行為の中には驚くような話が

たくさんあります。「こんな事例見たよ」「こんな話聞い
たよ」と情報交換することも、マナー啓蒙活動に繋が
りますので、どんどん話して広めてください。そして、自
分自身では気付いていないマナー違反もあるかもしれま
せんので、ここでこっそりチェックしてみませんか。

1. 気持ちよく撮るなら、独占よりも譲り合い

人気の撮影スポットは多くのカメラマンが集まります。後
ろに人が待っていないかどうか配慮して、撮ったら譲るのが
スマート。お互いの配慮が気持ちのよい撮影につながります。

こんなことがありました ①

夜明け前のサクラの大木の前で、三脚で場所取り。最
前列に置いて、車で暖を取っていた人が三脚に戻ってき
ました。二列目の人は「おれはここで1時間前から居る。
前に立たれると困る」と主張。いっぽうで最前列に三脚
を置いていた人は「おれは3時間前から三脚を置いていた」
と言い合いになり、陰悪ムード漂うなか、太陽が昇り撮
影スタート。これではいい写真も撮れませんよね。

では、どうすればよかったのでしょうか？ お互いに左右
に少しずつずれて撮りやすくしたり、撮ったら前後に交
代したり、人のことを思いやる心があれば、自然と打ち
解けあえるはず。まずは笑顔で「おはようございま
す！ 私もここから撮らせていただきますので、よろしく
お願いします！」と声を掛け合うことがおすすめです。

2. 一言かければ文句なし

誰だって勝手に自分の顔を撮られるのは気持ちのよいも
のではありません。人を入れた風景を撮りたい場合は、笑顔
で「こんにちは！ 撮らせていただいてもよろしいですか？」
と声をかけたり、撮影したあとに一声かけたりして断りを入
れましょう。

声をかける際に、自分の名前やメールアドレスを書いた名
刺を渡し、「ご連絡くだされば写真をお送りします」と一言
添えるのもよい方法。フォトコンテストに応募する場合
には、その名刺に応募する可能性がある旨記載しておくのも、
撮られる人にとっても、撮る人にとっても安心です。

3. 神社仏閣、教会など。

ならぬことは、ならぬのです

お寺や神社などは撮影禁止の場所や、柵・ラインを越えて
撮ってはいけない場所があります。まずは、注意書きがある
かどうかを確認し、あればその記述は必ず守りましょう。

こんなことがありました ②

ある日、風景写真を撮っていた人が、道を歩いてくる
親子のこどものしぐさが可愛く、こどもを入れた風景写
真を撮りました。その親子が去ったあとも同じ場所で風
景を撮り続けていると、トントンと肩を叩かれ、振り向
けば警察官が。近所の人か親御さんかはわかりませんが、
通報されていたのです。撮る前後に声をかけていればこ
のようなおおごとにはならず済みました。こどもだけ
ではなく、おとなに対しても同じく、肖像権があること
を意識して撮影しなければなりません。しかし、ものす
ごく神経質になるのではなく、一声かけることが大事な
だけです。案外「こんなに素敵に撮ってくれてありがとう」
と言われることも多いもの。コミュニケーションが大事
なのですね。

4. その写真、後ろめたさが写っている

「人と違う写真を撮りたい」と、立入禁止の場所に入るこ
とはご法度です。

海岸や山林など、立入禁止の場所である理由の多くは、危
険な場所だから。何かあった場合、自分だけでなく、人に迷
惑がかかることになります。フォトコンテストなどで入賞す
るため、写真展で注目されたいから、SNSで話題になりたく
て……と、自分の個性=人とは違う場所で撮ることと思っ
ている人もいらっしゃいますが、入ってはいけない場所で撮
った写真を発表しても、後ろめたさは残るもの。それなら、撮
ってよい場所で、自分の感性と腕で「個性」を発揮した方が
気持ちがよいですよ！

こんなことがありました ④

とある写真クラブでは、クラブ長が立入禁止の境界線
である、ロープを自分の足で踏み、グループメンバーを
立入禁止区域内に誘導していました。驚きますよね。団
体に属していても、従うべきは注意看板。そして、「注意
書きに気付かなかった」では済まされません。まず、撮
影する場所に行ったら、注意書きがあるかどうか確認
するのが、撮影の下準備です。



その写真 後ろめたさが写っている

5. 「なぜなら、そこに撮りたいものがあつたから」はあり得ない。民家で撮影

いくら撮りたい被写体があるからといって、民家などの私有地に断りもなく入ることは、マナー以前に不法侵入で犯罪になってしまいます。手入れのされた見事な庭など、撮りたい被写体があるときには一言断ってから撮影しましょう。また、撮りたい被写体が、私有地に入らないと撮れないという場合も同様です。勝手に入ってはいけません。

6. 三脚使いのプロは、移動、撮影、保管時に配慮できる人

三脚を使うことで撮れる写真の幅も広がり、三脚があるからこそ撮れる写真もありますよね。しかし、観光地や神社では、三脚禁止の場所が多くあります。「だったら一脚にしておく」という話でもありません。三脚がだめなら一脚も使えません。また、禁止の立て札がなくても、通る車や、通る人の迷惑にならないよう気を遣いましょう。

三脚は、撮影で使っていないときにも配慮が必要な機材。持ち運ぶときに担ぐ人がいますが、人に当たると危ないですし、カメラにも負担がかかり、よいことはありません。

こんなことがありました ⑥

三脚を使わないときに、近くの壁や木に立てかけている人がいました。まあまあよく見る光景です。しかし、こどもが通ったときに三脚が倒れ、こどもの足に雲台が落ちて指を骨折させてしまいました。三脚は、人の邪魔にならない場所に「寝かせて」置きましょう。

7. マエ、ヨコ、ウシロに人がいます

ファインダーを覗いていると、ついつい周りの人の存在を忘れがち。ファインダーを覗いたまま移動すると、人にぶつかってしまいます。また、「あ！ いい瞬間！」と、急に道の

まんなかで立ち止まるのも危険です。カメラを持っていると、シャッターチャンス逃すまいと、ついつい撮ることが優先になりがちです。もたもたしていて撮り損ねたら残念ですものね。しかし、人の邪魔になってまで撮る必要があるかという、そういうわけでもないですよね。とくに、被写体に気付く反射神経がすばらしい方、撮る前に周りをさささっと見渡してみましょう。



マエ、ヨコ、ウシロに人がいます

こんなことがありました ⑦

街でとてもきれいな夕日を見つけ、道の端によけて撮影をしている人がいました。「もう少し後ろに下がれば、手前の木もシルエットで入れられる」と感じ、反射的にカメラを構えたまま後ろに一歩下がったそのとき、右から走ってきた自転車と衝突。自転車に乗っていたご婦人は転んで起き上がれず、足をけがしてしまいました。悪いことをしている意識はなくても、ふとしたことで事故に繋がってしまうものです。



カメラマンの荷物は多いことを自覚する

8. カメラマンの荷物は多いことを自覚する

カメラ・レンズ・三脚・バッグ……撮影するために必要な装備はたくさんあり、かさばります。「機材が入っているのだから仕方ない」と、人の通る場所に堂々とバッグを置いてしまうと、通行の妨げになります。また、移動するときは、カメラバッグやリュックの幅も考慮して、人にぶつかからないようにしましょう。こどもの目線にカメラや三脚などがぶつかからないか、持ち方にも配慮が必要です。

9. 車は決められた場所に停めましょう

車で撮影地へ移動する機会も多いもの。注意したいのは駐車についてです。なるべく撮影ポイントの近くまで行こうとして、狭い道や駐車禁止場所に駐車することや、林道や民家のそばで深夜・早朝にエンジンをかけっぱなしにしたり、大声で話したりすることは付近の住人にとって大変迷惑となります。ちょっとしたまわりの方への配慮でトラブルを回避できます。

10. 撮るためなら手段を選ばない?

「こんなことあるの?」と思うようなマナー違反、危険行為があります。高さがほしいからベンチの上に乗る、フェンスがあって撮れないからフェンスをレンズの大きさに広げる(!?)、駅のホームのラインから出てはいけないのなら、足はラインぎりぎりに置き、カメラと体をぐんと乗り出す(危ないことに変わりない!)など。撮る前に、まず深呼吸を2回して冷静に。

11. 植物を大切にすれば、大切な作品が生まれます

枝を折ったり、花を切ったり、植物を傷めてはいけません。植物の採取も禁止です。

例えば、「枝が邪魔だけれど、折るのはまずいから、ぐいっと枝を下に引っ張ろう」という場合、これくらいは許容範



枝を少しよけるのはOK 傷つくほど引っ張るのはNG

困なのか、それとも悪いことなのか、微妙なボーダーラインです。そこで考える目安となるのは、頑張って成長している枝をぐいっと引っ張ることで、傷がついたり、枯れてしまったりしないかどうか。「かわいそう」と思ってやめるのが写真を楽しむ、自然を愛する心ではないでしょうか。多少、枝を避けるくらいなら、枝に影響はありませんので問題ないという判断です。花を撮影する際にも、撮りたい花の近くにあった枯れている花が邪魔だからと、勝手にむしり取ってしまったら、そのあとに種ができる自然の流れを人間が止めてしまうこととなります。

こんなことがありました ⑧

ある神社では、サクラの木の根元を囲むように、大きい石が点々と円になって置かれていました。そこでサクラを撮影していた人は、その石の意味がわからなかったため、囲んである石の中に入り、サクラの木の根元から上を見上げて撮影。すると、神主さんに「桜の根が傷つくから入らないでください!」と怒られてしまいました。自然を撮らせてもらう身として、その自然のことを勉強することも大事なこともかもしれません。自然を大切にしたい、きれいな景色を守っていききたいものです。

12. ストロボひとつで大事件にも

強いストロボの光を赤ちゃんや動物に向けると失明する恐れがあります。また、線路近くで撮影する際に、走行中の列車に向けてストロボを発光すると、運転士の目に衝撃をあたえて事故に繋がる可能性があるため、とても注意が必要です。

13. 写真を撮りに来ない人も見たい場所

どの場所でも、撮る人も撮らない人も皆さん平等です。撮影するからといって撮らない人を押しのけて撮影ポイントを独占してよいという理屈は通りませんよね。「他のカメラマンも撮っているから自分もよいだろう」と長時間に渡り、観光スポットを占領するのは考えものです。

※このコーナーで使用している写真は例示として特別に了解を得て撮影されたものです。

野田真愉美

フォトカルチャー倶楽部 プランニングディレクター

フォトカルチャー倶楽部とは全国5万5千人の写真愛好家を擁する写真クラブ。会員へ季刊で撮影情報誌を発行、各地で撮影会や写真教室を開催。「みんなで新しい写真体験を!」をスローガンに、撮影ハウツーやマナーを伝えている。

活動の詳細、入会方法は「npopcc」で検索